日本中國學會報　第五十一集

蘇軾の超然臺の詩詞

――熙寧九年に起こった詩禍事件――

保苅佳昭

一　はじめに

北宋の熙寧七年（一〇七四）、蘇軾は、杭州通判から、知密州に轉任した。密州（山東省諸城）に着いたのは、その年の十一月の初めである。密州は、前任地の杭州に比べ、貧しくひなびた地であり、彼が着任した時、穀物は數年來の凶作で、盜賊が跋扈し、未結審の訴訟が溜まっていた。また、旱魃や蝗の被害も起こっており、密州着任早々、彼は公務に追われることになった。それに加え、この時期、蘇軾は體調がかなり惡かったようである。知密州の職は、弟蘇轍がいる濟南の近くに任地を得たとはいえ、肉體的にも精神的にもかなりきついものであったろう。

着任早々公務に追われる日々。杭州に比べ景勝の地も無く、親しい友もいない。そこでは、文學の創作に、エネルギーと時間を傾ける餘裕はあまり無かったと思われる。事實、密州に來てから熙寧八年末までの、在任一年目に作られた詩は五十四首、詞は六首と非常に少ない。前任地の杭州では、三年の間に詩は三二〇首あまり、詞は四十首作られている。ただ、それでも在任二年目になれば、少しずつ落ち着きを取り戻し、氣持ちの上でも餘裕が出て來たようである。そんな折、彼は一つの樂しみを見出す。それは、官舍の庭園の北側にあった廢臺を改修し、そこで友と周圍の景色を樂しみ、心を解き放つ遊びである。「超然臺の記」（『東坡集』卷三十二）には次のようにある。

處之期年、而貌加豐、髮之白者、日以反黑。余既樂其風俗之淳、而其吏民亦安予之拙也。於是治其園圃、繫其庭宇、伐安丘高密之木、以修補破敗、爲苟完之計。而園之北、因城以爲臺者舊矣。稍葺而新之、時相與登覽、放意肆志焉。

（處ること期年にして、貌は豐を加え、髮の白き者、日びに以て黑きに反る。余既に其の風俗の淳きを樂しみ、其の吏民も亦た予の拙なるに安んずるなり。是に於いて其の園圃を治め、其の庭宇を繫め、安丘・高密の木を伐りて、以て破敗を修補し、苟完の計を爲す。而して園の北、城に因りて以て臺と爲す者舊し。稍や葺きて之を新にし、時に相與に登覽し、意を放ち志を肆にす。）

「密州の地に身をおいて一年、顏つきがふっくらとし、白髮が黑くなった」というのは、にわかには信じ難いが、それにしても、これ程のことが言えるようになったのは、精神的に餘裕が出て來た證據である。この地に來て一年、蘇軾は心を解き放つ場を得る。それを聞いた弟の蘇轍は、「超然臺の賦」（『欒城集』卷十七）を寄せ、その臺を「超

然臺」と名付けた。「超然」とは、外物に煩わされることのない境地という意味である。蘇軾はこの「超然臺」の名が非常に氣に入り、「超然臺の記」を書き、超然たる生き方を綴った。また、張耒等に「超然臺の賦」を作ることを依頼し[1]、李清臣に「超然臺の記」を清書して與えた[2]。

「超然臺の記」に書かれているように、密州在任二年目、氣持ちの上で餘裕が出て來れば、より多くの詩詞を作るであろうし、また、心を解き放ち、周圍の風景を樂しみ、同僚と歡飲する場「超然臺」が出來れば、そこは當時の蘇軾にとって、文學を創作する格好の場所となろう。事實、詞は、密州在任二年目の熙寧九年には、前年の約倍の十一首が作られている。更にこの十一首の中には、超然臺で作られたものが、約半數の五首もある。一方、詩の方は、この年に六十五首が作られているが、その中には、「和文與可洋川園池三十首」の三十首連作が含まれており、それを考えに入れると、作詩の機會は、前年と比べてむしろ減っている。また、超然臺完成後、密州で作られた、この臺に關わる詩は、「和潞公超然臺次韻」、「七月五日二首」、そして「和魯人孔周翰題詩二首」であり、けっして多くはない。詞の約半數が超然臺に關わる作品であることと比べると、むしろ少な過ぎる感がある。また、その內容を見ても、とても「超然」を標榜した人物の作とは思えない、もの寂しい雰圍氣が漂い、苦惱に滿ちたものになっている。

本稿では、この、蘇軾の超然臺に關わる詩詞の間に見られる相違に注目し、それが何に因るのかを考えてみたい。なお、テキストは、基本的に馮應榴『蘇文忠公詩合注』（中文出版、一九八二年三月）、曹樹銘『蘇東坡詞』（臺灣商務印書館、一九九六年六月）に據り、作品を引く場合、詩は『合注』の卷數を、詞は『蘇東坡詞』の作品番號をそれぞれ示した。また、『蘇文忠公詩編注集成總案』（巴蜀書社、一九八五年十一月）を隨時參考にしたが、それを引く場合は、『蘇詩總案』と略した。その他のテキストについては、適宜當該箇所に示した。

二　「望江南」と「七月五日二首」其一

超然臺の完成後、最も早く作られたこの臺に關わる詩詞は、熙寧九年（一〇七六）の晚春に作られた詞065「望江南・超然臺作」である。この詞が作られた後、連作という形で、もう一首同じ詞牌の作品が作られている。蘇軾は、詩に先んじて、まず詞で超然臺を詠じたのである。「望江南・超然臺作」は、次のとおりである。

春未老、風細柳斜斜。試上超然臺上看、半壕春水一城花。煙雨暗千家。　寒食後、酒醒却咨嗟。休對故人思故國、且將新火試新茶。詩酒趁年華。

（春未だ老いず、風は細やかに柳は斜斜たり。試みに超然臺の上に上りて看れば、半壕の春水一城の花。煙雨千家暗し。寒食の後、酒醒めて却て咨嗟す。故人に對して故國を思うを休めよ、且らく新火を將て新茶を試みん。詩酒もて年華を趁わん。）

この詞は、まずその前闋に、晚春の風景が描かれている。そよそよと吹く風、斜めに搖れる柳。それに觸發され、蘇軾は超然臺に上ってみる。すると、堀の水、町中に咲く花々、家々を包む霧雨が目に入る。それを承け、後闋は、まず異鄕で淸明節を迎える寂しさがうたわれている。そして、その寂しさを「しばし新火で沸かした茶を飲んで忘れ、この美しい春を、詩を作り酒を飲んで樂しもう」と言っている。

この詞は、春の景に觸發され、超然臺に上って作ったものである。

異郷で清明節を迎える寂しさがうたわれているが、王水照氏が「結尾寫聊以詩酒新茶自娛自解、暗與臺名呼應」と指摘されているように、[3]それを解消しようとする姿勢も詠まれている。この詞には、異郷に身を置く辛さを、超然臺に上り風景を眺め、茶を飲み詩を作り酒を傾けることで、消そうとする思いがうたわれている。また、超然臺の名が、まず「超然臺作」と小序に示され、更に作品本文中にも「試上超然臺上看」とあり、二度も見える。それは、愛弟蘇轍からもらった「超然臺」の名を、彼が非常に氣に入り、詞に詠み入れようとしたことを物語っていよう。

次に連作のもう一首、066「望江南」を見てみる。

春已老、春服幾時成。曲水浪低蕉葉穩、舞雩風軟紵羅輕。酣詠樂昇平。　微雨過、何處不催耕。百舌無言桃李盡、拓林深處鵜鴂鳴。春色屬蕉菁。

（春已に老ゆ、春服幾時か成らん。曲水浪低く蕉葉穩やかに、舞雩風軟かくして紵羅輕し。酣詠して昇平を樂しまん。微雨過ぎ、何れの處にか耕すを催さざらん。百舌言無く桃李盡き、拓林の深き處鵜鴂鳴く。春色蕉菁に屬す。）

こちらの詞の方が、先ほどの詞より、更にはっきりと超然の境地が述べられている。前闋は『論語』先進篇の「莫春には春服既に成り、冠者五六人童子六七人を得て、沂に浴し、舞雩に風して、詠じて歸らん」を踏まえた表現である。この『論語』の言葉は、孔子が弟子達に「もし誰かがお前達を認めて用いてくれたなら、どうするかね」という問いに對して、曾晳が答えたものである。孔子の政治についての問いに、曾晳はあくまで自分の樂しみを述べる。それは、まさしく「超然」の態度である。蘇軾もこの言葉を借りて、超然臺で、當時の心境を語る。そして、「酒を存分に飲み詩を詠じ平和な時を謳歌しよう」とうたう。「春服幾時成」の部分、「春着が未だあつらえられない」ことであり、自分の境遇の悪さに對する不滿が述べられているが、自分を曾晳の境地に押し上げようとする姿勢を言っているのは、間違いない。『論語』の言葉は「人が自分を認めてくれても殊更に力むようなことはない。自分は自分」という考え方に立ったもので、これは裏を返せば「たとえ人が自分を認めてくれなくとも、別に嘆くことはない」ということである。蘇軾の言わんとしたことは、ここにある。「權力の秤がどちらに傾いても、また任地がどこであっても、自分は自分の樂しみを見出し超然と生きるのだ」。「超然臺の記」を書き、自らの生き方を高らかにうたった彼に相應しい作品と言えよう。

以上、「望江南」の詞二首を見た。それらは、熙寧九年の晩春から初夏に作られたものである。一方、超然臺完成後に初めて作られた詩は、「和潞公超然臺次韻」（卷十四）である。この詩は、『蘇詩總案』に據れば、熙寧九年四月に作られたもので、今見た「望江南」の詞から少し後になる。ただ、この作品は、潞公（文彦博）が寄せた「寄題密州超然臺」詩に對して、言わば返禮として作られたもので、超然臺に關わる作品ではあるけれども、多分に社交辭令的な内容であり、超然臺登覽の作とは言えない。[4]言葉は悪いが、當たり障りの無いことが述べられている。そこで、この詩については、本稿では一先ず置くことにし、その次に作られた「七月五日二首」（卷十四）を取り上げてみる。二首連作であるが、其の一には、以下のようにある。

避謗詩尋醫、畏病酒入務。蕭條北窗下、長日誰與度。今年苦炎熱、草木困薰煮。況我早衰人、幽居氣如縷。秋來有佳興、秫稻已含露。還復此微吟、往和糟牀注。

（謗りを避け詩は醫を尋ね、病を畏れ酒は務に入る。蕭條たる北窗の下、長日誰と與にか度らん。今年苦だ炎熱、草木薫煮に困す。況んや我れ早衰の人、幽居して氣は縷の如し。秋來佳興有り、秫稻已に露を含む。還た復た此に微吟し、往くゆく糟牀の注ぐに和さん。）

この詩は、熙寧九年七月五日、超然臺に上り、時の密州通判趙成伯におくったものである。その初めの二句「避謗詩尋醫、畏病酒入務」というのは、「人から謗られるのを避けて詩を作らず、病を心配して酒をやめた」ということである。[6] 二句目の「體の具合を氣遣って酒を飲まずにいた」というのは、この年に作られた他の詩にも何度か見られるものであり、容易に理解できる。[8] 注目したいのは、一句目の「避謗詩尋醫」であり、意味を繰り返せば、「人から謗られるのを避けて詩を作らない」ということである。これは、當時、蘇軾の詩が物議をかもしており、そのため彼は詩を作るのを控えていたことを意味する。これに續く三句目から八句目には、「蕭條北窗下、長日誰與度。今年苦炎熱、草木困薫煮。況我早衰人、幽居氣如縷」と、詩作を控え、酒を飲まない日々の寂しさが綴られ、殊の外暑かった夏のことが述べられている。このことから、彼が物議を懸念して詩を控えようと思い立ったのは、この年の夏より前、熙寧九年の初め頃であったことが推測出來る。これは言い換えれば、熙寧九年の初めに蘇軾の詩に對して、とやかく言う者が現れたことを意味する。ただ、彼が夏の間中、全く詩を作らなかったわけではない。『蘇詩總案』に據れば、數は少ないものの十數首の詩が作られている（卷十四）。とは言え、彼が實際に詩を作ったかどうかは別としても、この「七月五日二首」其一の書き方からすれば、熙寧九年の初めに、蘇軾の詩に何らかの問題が起こり、彼は夏の間、詩作を控えようと思い續けていたことは間違いない。

今述べたように、この年の夏、詩は十數首作られている。その中には、彼の齊物の思想を展開した「薄薄酒二首」（卷十四）という詩もあり（この詩は『烏臺詩案』にも採り上げられている）、[7] 物議を懸念して詩を控えようという思いを持ちつつも、己の思想をうたい續ける、蘇軾らしい姿勢も見られる。とは言え、これら夏に作られた詩の中には、「避謗詩尋醫」と重なる發言も認められる。それは、「七月五日二首」の約一月前、夏六月に作られた「和趙郎中捕蝗見寄次韻」（卷十四）という詩である。この詩は合計二十四句からなる作品であるが、その最後の八句には、以下のようにある。

平生輕妄庸、熟視笑魏勃。愛君有逸氣、詩壇專斬伐。民病何時休、吏職不可越。愼無及世事、向空書咄咄。

（平生妄庸を輕んじ、熟視して魏勃を笑う。君に逸氣有りて、詩壇斬伐を專らにするを愛す。民病何時か休まん、吏職越ゆべからず。愼しんで世事に及ぶこと無かれ、空に向いて咄咄と書せ。）

この八句は、「君（趙成伯）は常々凡庸な者を輕んじ、あざ笑っています。私（蘇軾）は君が伸びやかな氣性のままに、詩の戰の場で敵を打ち負かすのを好ましく思っています。人民の苦しみは何時になったら終わるのやら。ただ、下級官吏の身で職分を越えてはなりません。くれぐれも時勢に言及した詩を作ってはなりません。かの殷浩のように空に向かって『咄咄怪事』と指で書いているに越したことはありませんよ」ということである。ここで蘇軾は趙成伯に、「詩は作っても世事に及んではなりません」と言っている（この詩は、趙成伯の詩に次韻したものであるが、趙成伯の元の詩は殘っていない）。それも、「困

苦に喘ぐ民を目にしても、世事に言及した詩を作ってはなりません」とまで言っている。これは非常に強い語氣の、詩で世事に言及することを戒めた言葉である。蘇軾は、杭州通判の時に、しばしば時勢に言及した詩を作った。また、杭州を離れ、密州に向かう途路、054「沁園春」という詞で、

有筆頭千字、胸中萬卷、致君堯舜、此事何難。用舍由時、行藏在我。袖手何妨閒處看。

（筆頭の千字、胸中の萬卷有るも、君を堯舜に致す、此の事何ぞ難き。用舍は時に由り、行藏は我に在り。手を袖にして何ぞ妨げん閒處にて看るを。）

とうたい、詞にまで時事に關わることを述べた。人民の苦しみを目にすれば、それを詩にうたい上げて行くのが、言わばそれまでの蘇軾の創作態度、姿勢であろう。ところが、ここでは「人民は苦しみに喘ぎ續けている。しかし、我々は下級官吏。政策について詩を作り批判してはなりません」と言う。これ程までに強い口調で忠告しているのは、この時、蘇軾が、詩に關わる「物議」のために、窮地に追い込まれていたからに違いない。當時、彼の朝政に言及した詩が、かなり問題視されていた。それによって、彼はただならぬ狀況に陥っていた。だからこそ、趙成伯には自分と同じような目に遭わぬよう、強く諫めたのである。

さて、それでは、この「物議」とは、どのようなものであったのか。

蘇軾は、三年後の元豐二年、烏臺の獄に下ることになるが、その時、弟の蘇轍は神宗に「爲兄軾下獄上書」（『欒城集』卷三十五）を奉り、助命嘆願をした。その中に、以下のような記述がある。

頃年通判杭州及知密州日、每遭物托興、作爲歌詩、語或輕發。向者曾經臣寮繳進、陛下置而不問。軾感荷恩貸、自此深自悔咎、不敢復有所爲。但其舊詩已自傳播。

（頃年通判杭州及び知密州たりし日、毎に物に遭い興に托して、歌詩を作爲し、語或いは輕發す。向者に曾經て臣寮繳進せるも、陛下置きて問わず。軾恩貸を荷むるに感じ、此れより深く自ら咎を悔い、敢て復た爲す所有らず。但だ其の舊詩已に自ら傳播す。）

ここから、次のことが讀み取れる。まず、『烏臺詩案』事件以前にも、蘇軾の「通判杭州」及び「知密州」の時に作った「歌詩」に不敬な發言があることを、神宗に上奏した者がいた。ただ、この一件は、神宗が採り上げず、言わば「不起訴」に終わった。蘇軾は、神宗が採り上げなかったことを恩に感じ、この一件から後、悔い改めて、二度と同じことはしなかった。

この『烏臺詩案』以前に起こった「事件」について、蘇軾の傳記、事跡に關する資料に、記錄は殘されていない。また、『續資治通鑑長編』にも、該當する記載は見出せない。なぜ、彼の傳記、事跡に見られず、史書にも無いのか。この點は更に檢討する必要が大いにあるが、しかし、弟蘇轍の神宗に奉った書に、このような記述があることから、この上奏事件は、實際にあったことは間違いない。兄の助命嘆願書に僞りを書くことは、まず考えられないからである。

この「爲兄軾下獄上書」には、「誰が」、「何時」、上奏をしたのか明記されていない。ただ、その上奏があった時期は、蘇軾が密州に着任してしばらく經った後から、徐州着任後間も無い頃の間と考えられる。それは、まず、この「書」に「通判杭州及知密州日」とあり、「杭州」と「密州」の二つだけが記されているからである。假にもし、「通判杭州」の時に起こったのであれば、「知密州」の記述は要らないで

あろうし、また、蘇軾が徐州着任後しばらく經っていたとすれば、必ず「徐州」が書き加えられたはずだからである（『烏臺詩案』には、密州離任後の作品も少なからず採られている）。また、この「書」には、「上奏が不起訴となった後、蘇軾は皇帝の恩に感じ、二度とそのような詩は作らなかった。しかし、自分の意に反して、以前作った詩が廣まってしまった」と書かれているが、假に、蘇軾が自戒したにもかかわらず、以前の詩が傳播してしまった時期を、徐州から湖州までとすると、實に時間的にすんなりと繋がる。ということは、この上奏があったのは、先に指摘した、「避謗詩尋醫」、「民病何時休、吏職不可越。愼無及世事、向空書咄咄」という發言が見られ、作られた詩の數が少ない、「知密州」在任二年目、熙寧九年の初め頃と考えて、時間的に全く無理は無い。むしろ、この年に起こったと考えた方が、その翌年に起こった、蘇軾が密州を離れ、徐州に行く途中、都開封に立ち寄ろうとして、入城を拒まれるという奇妙な事件とも結び付く。

蘇軾は熙寧九年十一月、河中府轉任の命を受け、年末に密州を離れた。その旅の途中、陳橋驛で知徐州に改めるという告命を受けた。彼は、そこで徐州に赴く前に、開封に立ち寄ろうとした。しかし、「旨有りて國門に入るを許されず、城外の范蜀公の園に寓[8]」することになってしまった。蘇轍の「寄范丈景仁」（『欒城集』卷八）の詩には、その時のことを、以下のように述べている。

我兄東來自東武、走馬出見黃河濱。及門却遣不得入、回顧欲去行無人。

（我が兄東のかた東武より來り、馬を走らせ出でて黃河の濱を見る。門に及んで却て遣られて入るを得ず、回顧して去らんと欲するも行くに人無し。）

この詩からすると、蘇軾に豫め入城が出來ないという情報が入っていたのではなく、城門までやって來て入ろうとしたところ、「却遣不得入」、つまり門前払いをくったのである。蘇轍の詩は、少々おおげさに書いているのかもしれないが、それにしても、入城を許されないというのは、ただ事ではない。この「入城拒否事件」についても、なぜ、入城を拒否されたのか説明をしている資料は無い。これが、先に指摘した「物議」の影響と考えると、うまく説明がつく。つまり、熙寧九年の初め頃、蘇軾の詩に問題發言があるという上奏があり、彼自身もそれを憂慮し、詩作を控えていた。それを彼は「七月五日二首」の詩で「避謗詩尋醫」と述べた。また、世事に觸れる詩を作ったために窮地に立たされてしまった經驗から、同じ目に遭わぬよう、趙成伯に、「民病何時休、吏職不可越。愼無及世事、向空書咄咄」ときつく忠告した。そして、その事件が未だ解決を見ていなかったため、あるいは、一應解決したものの、その一件が尾を引いて、都開封への入城を拒まれた、と考えるである。

この「爲兄軾下獄上書」に記されている不起訴事件と開封入城拒否との關連については、既に内山精也氏が簡單であるが觸れている[9]。ただ氏は、その「關連」に觸れながらも、不起訴事件が起きたのを「密州知事離任後、すなわち熙寧九年の年末以降の、一二年の間と推定できる」としている。しかし、この「事件」と開封入城拒否とを關連付けるには、「事件」が入城拒否以前、それもある程度時間を溯った時點で起こっていなければならない。とすれば、ここで述べたように、何者かによって、蘇軾の詩を問題視する上奏があったのは、熙寧九年の初めと考えるべきであろう。

三　「七月五日二首」其二と「和魯人孔周翰題詩二首」

さて、本節では、「七月五日二首」其二を讀み、更に幾つかの問題を考えてみたい。

何處覓新秋、蕭然北臺上。秋來未云幾、風日已清亮。雲間聳孤翠、林表浮遠漲。新棗漸堪剝、晚瓜猶可餉。西風送落日、萬竅含悽悵。念當急行樂、白髮不汝放。

（何れの處にか新秋を覓む、蕭然たる北臺の上。秋來未だ云に幾ばくならざるも、風日已に清亮たり。雲間孤翠聳え、林表遠漲浮かぶ。新棗漸く剝つに堪え、晚瓜猶お餉るべし。西風落日を送り、萬竅悽悵を含む。念う當に急ぎ行樂すべし、白髮汝を放たざらん。）

第一首目で「夏の間、詩を作らず、酒を飲まなかった」と述べた蘇軾。その「禁」を破ってうたったものは何か。それは秋の超然臺、そして、そこからの眺めである。「秋の訪れを見付けるのはどこか。それはもの寂しい北臺の上」。蘇軾は初めの二句でこのように言う。そして、清々しい秋の氣を述べ、周圍の風景を描く。最後の二句では、「急いで遊ばなければなりません。老いはあなたを待ってはくれませんから」と趙成伯に語り掛けている。

超然臺のことを初めて詩でうたったのは、「和潞公超然臺次韻」である。ただ、その詩は、先にも述べたように返禮として作られたものであり、「時に相與に登覽し」て、超然臺で作ったものとは言えない。一方、「七月五日二首」は、趙成伯と共に超然臺に上り、秋の氣に觸發されて作ったものである。ということは、この詩は、事實上、超然臺完成後、實際に超然臺に同僚と共に上り、その臺で初めて作った詩、ということになる。それにしては、作られたのが「七月五日」というのは、超然臺が出來上がってから、かなり時間が經っている。超然臺が出來上がったのが、熙寧八年の末頃であろうから、この時、既に半年以上も經っている。「超然臺の記」で「雨雪の朝、風月の夕べ、余未だ嘗て在らずんばあらず」と述べていることからすれば、「七月五日」は、遲過ぎる。前節で見たように、詞では、詩に先だって春に、「望江南・超然臺作」が作られている。超然臺登覽の作が、先に詞でもって作られ、その後、遲れて詩で作られたは、單なる偶然であろうか。

上奏事件が起こったのは熙寧九年の初めである。しかし、この年に作られた蘇軾の詩を見ても、この事件について觸れているのは、「七月五日二首」だけである。ただ、この詩以前に、上奏事件に言及する機會が、彼に全く無かったかというと、そうではない。繰り返すが、詩を控えようと思っていた夏にも、數は少ないながら、詩は作られている。しかし、それら夏に作られた詩を見ても、當然「七月五日二首」に先立って觸れていいはずの「事件」、そして詩作を控えていたことは述べられていない。先に指摘したように、「和趙郎中捕蝗見寄次韻」の中に、その「事件」を匂わせる「愼無及世事」という言葉があるだけである。また、この「和趙郎中捕蝗見寄次韻」は、夏六月に、「七月五日二首」と同じく趙成伯におくったものである。蘇軾は、同じ相手に對して、夏六月に「和趙郎中捕蝗見寄次韻」の詩をおくっておきながら、秋七月には「七月五日二首」を作り、「自分の詩が物議をかもしているので、夏の間詩は作らずにいた」と言ったことになる。これは、不自然さを免れない。「事件」及び詩を控えていたこと

は、秋に作られた「七月五日二首」よりも、むしろ六月の作「和趙郎中捕蝗見寄次韻」で語られるべきであろう。秋になって作られた「七月五日二首」の詩に、上奏事件、そして詩作を控えていたことが述べられているのは、蘇軾がこのことを、特に「七月五日二首」に詠み込まなければならなかった理由があったと見るべきである。「七月五日二首」と他の詩との違いは何か。それは超然臺登覽の作か否か以外には考えられない。

蘇軾は秋七月になって、ようやく超然臺登覽の詩を作った。超然臺が出來て、既に半年以上も經っている。それは結果的にそうなったのではない。それなりの理由があったのである。その理由を、詩の冒頭に「避謗詩尋醫」と述べたのである。もちろん、彼は作詩全般を極力控えていたのであろうが、特に超然臺の作を作らずにいたのである。これは言い換えれば、詩に不敬な發言があることで訴えられた「上奏事件」が、超然臺登覽の詩を控えさせていたことになる。それはもう一歩踏み込んで言えば、超然臺の詩を作ると、その内容が人に「謗」られるものになる、つまり、朝政に言及したものになってしまうことを意味する。

それでは、なぜ「上奏事件」が、超然臺の詩を控えさせたのか。この問題を考える前に、この臺で作られたもう一篇の詩「和魯人孔周翰題詩二首」（卷十四）を先に見てみる。

この詩には、「引」が付いており、そこには次のようにある。

孔周翰嘗爲仙源令、中秋夜以事留於東武官舍中。時陳君宗古任君建中皆在郡。其後十七年、中秋周翰持節過郡。而二君已亡。感時懷舊、留詩於壁。又其後五年、中秋軾與客飲於超然臺上、聞周翰乞此郡。客有誦其詩者。乃次其韻二篇、以爲他日一笑。

（孔周翰嘗て仙源の令たりしとき、中秋の夜事を以て東武の官舍の中に留まる。時に陳君宗古、任君建中皆郡に在り。其の後十七年、中秋に周翰節を持して郡に過る。而るに二君已に亡し。時に感じ舊を懷い、詩を壁に留む。又其の後五年、中秋に軾客と超然臺の上に飲し、周翰の此の郡を乞うを聞く。客に其の詩を誦する者有り。乃ち其の韻に次する二篇、以て他日の一笑と爲さん。）

この「引」に據れば、この詩は、熙寧九年八月十五日、超然臺で催された宴席で作られたものである。二首連作であるが、その第一首目には、孔周翰[10]が嘗て詩を書きつけた壁は崩れて讀めなくなってしまったが、友人も密州の風景も以前訪れた時のままであることが述べられ、「きっと來年は、明るい月が、ここで宴を催し、醉っ払って眠る密州知事の孔周翰先生を照らすことでしょう」とうたわれている。[11]そして、それを承け、第二首目は、蘇軾自身のことが詠まれている。

更邀明月說明年、記取孤吟孟浩然。此去宦遊如傳舍、揀枝驚鵲幾時眠。

（更に明月を邀え明年を說かん、記取せよ孤吟する孟浩然を。此れ去り宦遊傳舍の如し、枝を揀ぶ驚鵲幾時か眠らん。）

「明るい月が出てきたところで、私の來年のことを申し上げましょう。孔周翰先生、絶對に忘れずにいて下さい。この一人寂しく詩を吟じる、不遇な一生を送った孟浩然のような私のことを」。蘇軾はこのように、孔周翰に語り掛ける。そして、「密州の地を離れた後、自分ははたごを巡る旅暮らし。ゆっくりと心を休めるのは何時のことか」と辛い心情を吐露する。

この詩は、超然臺で、客を招いて行われた酒席の作である。外物に左右されないのが「超然」であり、宴が開かれたのは、それを冠した

「超然臺」である。そこで作られた作品にしては、いくら「他日一笑」とするにしても、悲哀の情が前面に出過ぎている。「孤吟孟浩然」とは、自分自身を、一人寂しく詩を吟じる、不遇な一生を送った孟浩然に喩えたものである。また、「此去宦遊如傳舍、揀枝驚鵲幾時眠」は、自分が密州離任後も、地方官暮らしに明け暮れ、身を落ち着ける場所の無いことを嘆いたものである。當時彼が抱いていた苦惱、不滿を、蘇軾は孔周翰にぶつけている。それも「記取」という言葉を使い、「絶對に忘れないでいて下さい」と、強い口調で訴えている。「驚鵲（びくびくする鵲）」の語、あるいは讀み過ぎかもしれないが、今起きている「事件」のために、自分が司直の手にかかるかもしれない不安を表しているとも取れる。この詩は、自分の置かれている境遇に對する不滿を、強い口調で綴ったものと言えよう。この年、熙寧九年に作られた詩を見ても、これほど悲しみに滿ち、辛い思いが前面に出た作品は他に見出せない。なぜ、超然臺登覽の詩がこのような內容になっているのか。

「超然」というのは、當時の蘇軾の生き方を象徵した言葉である。「超然臺の記」に言う「往く所として樂しまざる無き者は、蓋し物の外に遊ぶ」姿勢である。ただ、そもそも蘇軾が、なぜ「超然」を標榜し、その生き方を「超然臺の記」で力強く述べなければならなかったのかと言えば、それは自分が不遇な境遇に追いやられたからである。そして、「超然臺の記」は清水茂氏が指摘されているように、「自分の生活環境のよくないことを認識していることでもあって、いわば、不滿を『齊物』の考え方により收めようとさせているかのごとくして、實は、それを逆のたかちにしてぶちまけ」[12]たものである。これは言い方を換えれば、當時の環境、境遇の惡さが、「超然」の思想を生み出したとも言える。「超然」と「不滿、苦惱」は、言わば表裏一體なのである。「和魯人孔周翰題詩二首」の詩は、熙寧九年八月十五日に作られたものである。「超然臺の記」を著し超然の境地を標榜して、既に八ヶ月以上が經っている。その時、蘇軾は、自分を孟浩然に喩え、孤獨を訴え、不遇を嘆く。これは、矛盾に滿ちた言葉である。「超然臺の記」を書き、「齊物」の思想で不滿、苦惱を收めようと試みた蘇軾。しかし、現實には、それらを收め切れなかった。超然を標榜しつつも、心には解消出來ずにいる不滿、苦惱がわだかまっている。そんな彼がもし、「超然」を冠した超然臺で、時々の思いを綴ったならば、「超然」に惹かれて、筆は「不滿、苦惱」の方に向かってしまうだろう。「和魯人孔周翰題詩二首」の詩では、むしろこの「不滿、苦惱」の思いの方が、強く前面に出ているのである。これは、當時、蘇軾が置かれていた狀況からすれば、絶對に避けなければならない。「詩に不敬な發言がある」ということで訴えられている時に、境遇に對する不滿を述べた詩を作れば、嫌疑をますます深めることになり、事態は惡い方に向かうことはあっても、良い方向に向かうことは無い。世事に及ぶ言を極力避けようとするならば、詩で超然臺を扱うことを控えようとするのは當然である。とすれば、「七月五日二首」で述べられていた、「超然臺に關わる詩を作らずにいた」ことも、理解できる。「七月五日二首」という詩題は、一見、日付だけが唐突に付けられている感があるが、この日付が意味するものは、「今まで詩で超然臺を扱うことを控え續けて來たが、秋の氣に觸發され、遂に超然臺登覽の詩を作ってしまった日」ということではないか。

この「和魯人孔周翰題詩二首」を作った後、彼は、密州でこの臺を詩に詠ずることはない。これから密州を離れるまで、超然臺は、專ら

詞でうたわれる。

四　「水調歌頭」と二首の「江城子」

さて、「望江南」二首に續く、超然臺登覽の詞は、あの有名な069「水調歌頭・丙辰中秋歡飲達旦大醉作此篇兼懷子由」である。

明月幾時有、把酒問青天。不知天上宮闕、今夕是何年。我欲乘風歸去。惟恐瓊樓玉宇、高處不勝寒。起舞弄清影、何似在人間。
轉朱閣、低綺戸、照無眠。不應有恨、何事長向別時圓。人有悲歡離合、月有陰晴圓缺、此事古難全。但願人長久、千里共嬋娟。
（明月幾時よりか有る、酒を把りて青天に問う。知らず天上の宮闕、今夕は是れ何の年なるか。我風に乘り歸去せんと欲するも、惟だ瓊樓玉宇、高き處寒きに勝えざらんかと恐る。起ちて舞い清影を弄すれば、何ぞ人間に在るに似ん。　朱閣に轉じ、綺戸に低れ、眠る無きを照らす。應に恨み有るべからざるに、何事ぞ長えに別時に向かいて圓なる。人に悲歡離合有り、月に陰晴圓缺有り、此の事古より全うし難し。但だ願う人長久にして、千里嬋娟を共にせんことを。）

この詞は、熙寧九年の中秋、先に見た「和魯人孔周翰題詩二首」と同じ日に、超然臺で作られたものである。詩の方には、「更邀明月說明年」とあり、この詞の小序には「歡飲達旦大醉作此篇」とあることから、詞は詩の後で作られたことが分かる。

一說に、この詞は潤州の金山で作られたとも言われているが[13]、それは間違いである。ここで簡單に、この詞が超然臺で作られたことを確認してみたい。この問題は、詞の小序「丙辰中秋歡飲達旦大醉作此篇兼懷子由」が正しいことを證明すれば解決する。「丙辰中秋」は、熙寧九年の中秋であり、この日は、先に見た「和魯人孔周翰題詩二首」の「引」に「中秋軾與客飲於超然臺上」とあるように、超然臺で酒宴が催されているからである。蘇軾は、この詞が作られた翌年の熙寧十年、徐州の地で、やはり同じ詞牌の「水調歌頭」を作っている。その詞の小序には「余去歲在東武、作水調歌頭以寄子由。今年子由相從彭門百餘日、過中秋而去、作此曲以別。余以其語過悲、乃爲和之。其意以不早退爲戒、以退而相從之樂爲慰云（余去歲東武に在りて、水調歌頭を作りて以て子由に寄す。今年子由相彭門に從うこと百餘日、中秋を過ぎて去り、此の曲を作りて以て別る。余其の語の悲しきに過ぐるを以て、乃ち爲に之に和す。其の意は早に退かざるを以て戒めと爲し、退きて相從うの樂しきを以て慰めと爲すと云う。）」とある。このことから、この年の前年、つまり熙寧九年の中秋の日に、密州で「水調歌頭」を作り、蘇轍に寄せたことが分かる。とすれば、詞の小序「丙辰中秋歡飲達旦大醉作此篇兼懷子由」の內容と一致し、「水調歌頭」の詞が丙辰の中秋、超然臺で作られたことが證明される。

さて、この「水調歌頭」の詞は、中秋をうたった傑作であり、人口に膾炙した作品である。そこで、ここでは、細かい解釋は省き、「何似在人間」と「人有悲歡離合、月有陰晴圓缺、此事古難全。但願人長久、千里共嬋娟」の部分だけ、取り上げてみたい。

蘇軾は、月世界に思いを馳せる。しかし、そこは寒々として、自分はとても耐えられそうにない。そこで、「立ち上がって影と共に舞えば、とても自分が人間界にいるとは思われない。ここは月の世界と何ら變わらないのだ」と言う。この詞の前闋は、中央政界にいる者を謗ったものだと解する說もある。筆者は、その說に贊成するが、それは一先ず置いて、「人間界も月の世界と何ら變わらない」というのは、

視點の轉換であり、自分の置かれた場所を肯定的に受け入れる彼の姿勢、考え方を表している。また、蘇軾は、蘇轍の任地齊州に近い地を轉任先に希望し、密州にやって來た。しかし、この年の中秋も、結局、蘇轍と共に迎えることは出來なかった。「自分は、愛弟蘇轍と共に、晴れた空に懸かる滿月を、二人樂しく賞でようと心待ちにしていた。しかし、人には悲歡離合があり、月には陰晴圓缺がある。なかなか中秋の月を共に樂しむことは出來ない。ならば、二人長壽を保って、たとえ遠く離れた別の地にいようとも、同じ月を眺めて心を通じ合おう」。蘇軾はこのように蘇轍に語り掛ける。「人には悲歡離合があり、月には陰晴圓缺がある」。蘇軾は、目の前にある現實を認め、そして受け入れる。「ならば、二人長壽を保って、たとえ遠く離れた別の地にいようとも、同じ月を眺めて心を通じ合おう」と述べる。彼は兄弟が再會出來ない悲しみを、聲高に述べることはしない。むしろ、視點を換える姿勢を示す。また、「人有悲歡離合」は、「人には悲しい時もあれば、樂しい時もある。出會いもあれば別れもある」ということであるから、一種の循環論であり、當時の蘇軾に照らしてみれば、今は辛くとも、將來樂しい時が必ずやって來る、ということである。これは、先に見た二首の「望江南」でうたわれていた內容と重なるものであり、また、同じ時に作られ、悲しみを前面に出した「和魯人孔周翰題詩二首」とは、異なるものと言える。

詞には、更にもう二首、超然臺で作られたものがあるが、まず、「江城子・東武雪中送客」を見てみる。

相從不覺又初寒。對尊前、惜流年。風緊離亭、冰結淚珠圓。雪意緊、路漫漫、玉花翻。雲海光寬、何處超然。知道故人相念否、攜翠袖、倚朱闌。

（相從い覺えず又初寒。尊前に對し、流年を惜しむ。風は離亭に緊しく、冰は淚珠に結んで圓なり。雪意君を留めんとするも君住まらず、此れ從り去り、清歡少なし。轉頭山の上頭を轉じて看れば、路漫漫として、玉花翻る。雲海光（かがや）き寬く、何れの處か超然ぞ。知道（し）んぬ故人相念うや否や、翠袖を攜え、朱闌に倚り。）

この詞は、傅藻『東坡紀年錄』[16]に據れば、章傅[17]の旅立ちを送った時に作られたものである。その前闋には、章傅との別れを惜しむ氣持ちが述べられている。「私達二人が連れ立って過ごすうちに、何時の間にかまた冬がやって來た。君を送る宴。月日の經つのを惜しむ。强く吹く寒風に、悲しみの淚も凍る。雪にも意志があって、君を引き止めようとするけれど、君の旅立ちを如何ともすることは出來ない。これから後、清らかな樂しみも味わえなくなってしまう」。これを承けて後闋では、この地を離れ行く章傅のことがうたわれている。「君（章傅）は歩みを進め轉頭山の邊りにさしかかると、振り返って來し方を見る。しかし、道は遠く、雪が舞い、一面の銀世界に、送別の宴を催した超然臺の位置も分からないほど。自分を見送ってくれた友（蘇軾）は、私との別れを惜しみ、まだ見送り續けているだろうか。妓女とともに、朱の欄干に寄りかかりながら」。

この詞は、章傅の送別の宴で作られたものであるが、詩には、この時の作が殘されていない。ということは、蘇軾は章傅の送別の宴で詞のみを作ったことになる。この「江城子」以前の章傅に關わる詩詞を調べてみると、詩の方に「次韻答章傳道見贈」（卷九）、「遊廬山次韻章傳道」（卷十三）、「次韻章傳道喜雨」（卷十三）の三首が殘されている。一方、詞は、この「江城子」以外、見出せない。つまり、この二人の間には、この「江城子」以前に、詩のやりとりはあったが、詞を

おくりあうことは無かったことが分かる。とすれば、章傅の旅立ちに際し、餞の言葉を綴るには、むしろ詩が使われるのが自然である。ところが、送別の作品は、詞だけが作られている。なぜ、ここで詞が選ばれたのか。

「江城子」以前に章傅におくった「次韻答章傳道見贈」は、熙寧六年正月に作られたものであるが、この詩、實は『烏臺詩案』に採られ、朝政批判の證據に擧げられている。[16] 熙寧九年に起こった「事件」と『烏臺詩案』とがどのような形で絡んでいるのかは更に調査が必要であろう。ただ、『烏臺詩案』に證據として擧げられている詩の中で、熙寧八年までのものが、熙寧九年の「事件」でも、やはり證據として採り上げられていた可能性は十分にある。とすれば、もし、自分が起訴されてしまい、「次韻答章傳道見贈」の詩が證據採用されてしまえば、詩のやりとりをした章傅にも累が及ぶ。この時、蘇軾と章傅とは、微妙な關係にあったと言っていい。このような狀況で、彼の餞に、今問題となっている「詩」を、それも超然臺で、敢えて作るであろうか。ここはむしろ、今まで二人の間に一度もやりとりはなかったものの、酒宴でよく作られるもう一方の韻文「詞」を選ぶであろう。因みに他の二首「遊廬山次韻章傳道」、「次韻章傳道喜雨」は、ともに熙寧八年の作であり、當然のことながら、熙寧九年の「事件」が起こる前に作られたもので、詩をやりとりするのに何ら問題はなかった。

多分に推測の域を出ないが、熙寧八年まで詩をおくりあっていた相手に、熙寧九年、今まで一度もやりとりしたことの無かった詞を餞としておくっているのは、その場が「超然臺」であり、また、當時起こっていた「事件」が、そこに絡んでいたためと考えるのである。最後にもう一首、超然臺の詞 071「江城子」を見てみよう。

前瞻馬耳九仙山。碧連天、晚雲間。城上高臺、眞箇超然。莫使怱怱雲雨散、今夜裏、月嬋娟。　小溪鷗鷺靜聯拳。去翩翩、點輕煙。人事凄涼、回首便他年。莫忘使君歌笑處、垂柳下、矮槐前。

（前に馬耳九仙の山を瞻る。碧天に連なる、晚雲の間。城上の高臺、眞箇（まこと）に超然。怱怱として雲雨散ぜしむることを莫かれ、今夜の裏、月嬋娟たり。　小溪鷗鷺靜かに拳を聯ぬ。去ること翩翩として、輕煙に點ず。人事凄涼、首を回せば便ち他年。忘るること莫かれ使君の歌笑せし處、垂柳の下、矮槐の前。）

この詞の前闋では、まず超然臺からの眺めがうたわれ、「城壁の上の超然臺は、本當にその名の通りの建物だ」と言う。そして、「莫使怱怱雲雨散、今夜裏、月嬋娟」の部分は、「この宴を、そうそうにお開きにしないで、今宵美しい月を賞でつつ樂しもうではないか」ということである。それでは、この日の酒宴は何の會であったのか。それは、最後の「莫忘使君歌笑處、垂柳下、矮槐前」から、蘇軾が密州を離れる際の送別の宴であったことが分かる。熙寧九年十一月、知河中府の命が下った。「人事凄涼、回首便他年」は、「密州での辛かった日々も、この地を離れ、時が經てば過去のことになってしまう」ことを言ったものである。そんな密州離任の送別の宴で、蘇軾は「どうか同座の人々よ、そして超然臺よ、ここで知事を勤めた私のことを、忘れないでいておくれ」と語り掛ける。この詞は、言ってみれば超然臺への別れの作品である。

詞ではこのように、密州を離れる時の思いを超然臺でうたったものがある。しかし、詩には殘されていない。[17] 彼が密州を去るに當たり、何度か送別の宴が開かれたに違いない。そして、當然、超然臺でも行われたであろう。蘇軾は、その時の思いを、詞でのみ綴ったのであ

る。彼は密州を離れる際、自分の生き方の象徴であった超然臺に、詞で別れの言葉を綴った。これ一つを取ってみても、蘇軾が、超然臺では詩ではなく、むしろ詞を作ろうとしていたことが、十分分かるのである。

五　むすび

以上、密州での超然臺に關わる詩詞を見てきた。熙寧八年の末に超然臺は完成した。しかし、熙寧九年の初めに、詩に不敬な發言があるという上奏があり、蘇軾は詩作を控えなければならなくなってしまった。その中でも、特に世事に言が及ぶ可能性が多分にある超然臺に關わる詩は、控えていた。それは、蘇軾が「超然臺の記」を書いて超然たる生き方を標榜したのは、それを標榜せざるを得なかった不滿の思いがあったからである。そこで、超然臺では、詩を避け、もう一方の韻文「詞」を選び、時々の思いを綴ったのである。これは、逆の見方をすれば、當時彼の身に、詩に關わる問題が起こっていた傍證ともなり得る。超然臺を詩で扱わず、むしろ詞でうたったのは、詩で詠じることに何らかの問題があったと見做されるからである。

宋の文人にとって、詩は「廣い範圍にわたって鑑賞と批判の對象となることを常に意識しながら」[18]作るものであった。先に見た蘇轍の「爲兄軾下獄上書」にも、「但其舊詩已自傳播」とあり、彼の詩が廣く讀まれていたことが記されている。また、『烏臺詩案』事件の主たる證據も、當時彼の詩を集めて編まれた『蘇子瞻學士錢塘集』である。廣く讀まれることを前提にした詩は、當時の彼の置かれていた狀況からすれば、ある意味で危險である。些細な一言半句も、すべて表に出てしまうからである。一方、北宋において、詞という文學樣式は、唐に始まった、言わば新興の文學である。もちろん柳永のように、主に詞を作った「詞人」もいるが、當時の士大夫にとって、詞は詩文に次ぐものであったと言っていい。また、詩が「公」であれば、詞は「私」である。とすれば、たとえ、詞で言が世事に及んでも詩ほどに問題視されないという意識が、當時の文人にはあったろう。現存の『烏臺詩案』にも、詞は「水調歌頭・丙辰中秋歡飲達旦大醉作此篇兼懷子由」が一首採られているだけである。うたわれている內容からすれば、むしろ直接的に「有筆頭千字、胸中萬卷、致君堯舜、此事何難。用舍由時、行藏在我。袖手何妨閒處看」と言った「沁園春」の詞が、採り上げられるべきであろう。「水調歌頭」が採られたのは、もちろん疑惑を持たれる表現があったのであろうが、內容よりも、むしろこの詞が世に廣く傳わっていたからではないか。

蘇軾は、密州を離れた直後、河中府に向かう途中で「大雪青州道上有懷東武園亭寄交代孔周翰」（卷十五）という詩を作る。その詩の冒頭で、

超然臺上雪、城郭山川兩奇絕。海風吹碎翠瑠璃、時見三山白銀闕。
（超然臺上の雪、城郭山川兩ながら奇絕たり。海風翠瑠璃を吹き碎き、時に三山の白銀の闕を見る。）

と言っている。更に、この詩では、河中府に向かう自分を、

君不見淮西李侍中、夜入蔡州縛取吳元濟。又不見襄陽孟浩然、長安道上騎驢吟雪詩。何當閉門飲美酒、無人毀譽河東守。
（君見ずや淮西の李侍中が、夜蔡州に入り吳元濟を縛取せしを。又た見ずや襄陽の孟浩然が、長安の道上驢に騎りて雪の詩を吟ぜしを。何か當に門を閉ざして美酒を飲み、人の河東の守を毀譽する無かるべき。[19]）

と述べている。蘇軾は密州在任中、超然臺の詩を控えていた。また、「超然臺」の名にしても、詞には何度か詠まれているが、詩では「和潞公超然臺次韻」を除くと、「和魯人孔周翰題詩二首」の「引」に一度出て來るだけで、詩の本文には書かれていない。「七月五日二首」の詩では、却って舊名の「北臺」が使われている。ところが、密州を離れると、その名を詩の冒頭にうたい込み、また、そこからの眺めの美しさを綴る。そして、河中府に向かう自分を再び孟浩然に喩え、更に季布を引き合いに出し、「毀譽褒貶に左右されずにすむ暮しは、何時になったら出來るのか」と嘆く。蘇軾にとって、密州離任後眞っ先に思い出されるのは超然臺であり、また、熙寧九年の中秋、超然臺で自らを一人寂しく詩を吟じる孟浩然に喩え、不遇の思いを述べた「和魯人孔周翰題詩二首」の詩であった。彼は、密州在任時、超然臺に身を置きながらも、そこで詩を作ることを自制せざるをえなかった。しかし、今はその地を去ったことで、幾分かその重壓が輕くなったのであろう。この、冒頭に「超然臺」がうたわれている詩からは、今まで抑え續けてきたものを、吐き出している感じを受ける。ただ、それと同時に、蘇軾の「たとえ密州を離れても浮き沈みの多い世界に身を置くことに變わりは無い」という苦惱の思いも讀み取れる。

密州を離れた直後、彼の地での日々を思い返して作った詩に、却って「超然臺」が冒頭にうたい込まれているところに、蘇軾が密州で超然臺の詩を控えていたことが窺い知れる。また、その詩で再び自らを孟浩然に喩えたのは、熙寧九年に作られた「和魯人孔周翰題詩二首」の詩を强く意識したからに違いない。蘇軾にとって「和魯人孔周翰題詩二首」は、けっして忘れることの出來ない作品であったと言えよう。

注

(1) 張耒の「超然臺の賦」の序に見える(『張耒集』〔中華書局、一九九八年七月〕十五頁)。また文同にも「超然臺の賦」がある(『丹淵集』卷一)。

(2) 『烏臺詩案』の「供狀」「與李清臣寫超然臺記并詩」の條に見える(宏業書局『函海叢書』六册所收『烏臺詩案』、三一一頁)。

(3) 『蘇軾詩詞選注』(建宏出版社、一九九六年一月)二〇三頁。

(4) 「和潞公超然臺次韻」:「我公厭富貴、常苦勳業尋。相期赤松子、永望白雲岑。清風出談笑、萬竅爲號吟。吟成超然詩、洗我蓬之心。嗟我本何人、麋鹿强冠襟。身微空志大、交淺屢言深。囑公如得謝、呼我幸寄音。但恐酒錢盡、煩公揮橐金。

(5) 注に「王註師曰、詩尋醫謂不作詩也。酒入務謂止酒不飲也」とある。

(6) 例えば、熙寧九年の春に作られた詩「立春日病中邀安國仍請率禹功同來。僕雖不能飲當請成伯主會某當杖策倚几於其間觀諸公醉笑以撥滯悶也二首(立春の日、病中安國を邀え、仍お請うて禹功を率いて同に來たらしむ。僕飲む能わずと雖も、當に成伯に請うて會を主らしむ。某當に策を杖きて几に其の間に倚り、諸公の醉笑するを觀て、以て滯悶を撥うべきなり二首)」(卷十四)など。

(7) 「供狀」「與王詵往來詩賦」の條。注3所掲『烏臺詩案』、三一〇六頁。

(8) 施宿『東坡先生年譜』(王水照編『宋人所撰三蘇年譜彙刊』〔上海古籍出版社、一九八九年十一月〕所收)の熙寧十年の條。

(9) 「橄欖」第七號(宋代詩文研究會、一九九八年七月)所載の「東坡烏臺詩案考(上)」四節「同時代士大夫の反應」(三〇三頁)。

(10) 孔宗翰、字は周翰。生卒年未詳。曲阜の人で孔子四十五代の子孫孔道輔の次子。進士に及第し、知仙源縣、通判陵州、夔峽轉運判官、提點京東刑獄、知虔州を勤めた。その後、陝、揚、洪、兗州の知事を歴任し、元祐の初め、哲宗に召され司農少卿となり、鴻臚卿に遷り、刑部侍郎に進んだ。『宋史』卷二九七に傳がある。

(11)「壞壁題詩已五年、故人風物兩依然。定知來歲中秋月、又照先生枕麴眠」。

(12) 中國古典選『唐宋八家文』四（朝日新聞社、一九七九年二月）五十一頁。

(13) 蔡絛『鐵圍山叢談』（中華書局、一九九七年十二月）巻三、五十八頁。

(14) 章傅、字は傅道、閩の人。生卒年未詳。彼の事跡についてはよく分からないが、蘇軾の詩、蘇舜欽の「答章傅」詩などから、不遇な一生を送ったようである。

(15) 傅藻『東坡紀年錄』に「十二月……東武雪中送章傅道。東部道中皆作江神子」とある（注9所掲『宋人所撰三蘇年譜彙刊』所收『東坡紀年錄』四一五頁）。

(16)「供狀」「次韻章傅」の條。注3所掲『烏臺詩案』三一一七頁。

(17) 密州離任の際に作られた詩は「別東武流杯」、「留別雪泉」、「留別釋迦院牡丹呈趙倅」（ともに巻十四）であり、超然臺の作は無い。

(18) 前野直彬著『春草考』（秋山書店、一九九五年二月）七「唐詩と宋詞の間」二三七頁。

(19)『東坡集』（『蘇詩佚注』〔倉田淳之助刊、一九六五年三月〕所收）及び『施注蘇詩』（『增補足本施顧註蘇詩』〔藝文印書館、一九八〇年五月〕）は、「君不見」を「君不是」に、「又不見」を「又不是」に作る。王文誥はこの部分について「君不是以下六句、皆公自謂也」と注している（中華書局・中國古典文學基本叢書『蘇軾詩集』第三册、七一五頁）。これに從えば、孟浩然の二句は「また自分は、長安に行く道中、驢馬に乘り雪の詩を吟じた孟浩然ではないのだ」となる。本稿は『合注』に據ったが、どちらにしても、「大雪青州道上有懷東武園亭寄交代孔周翰」の詩で、蘇軾が再び孟浩然を出している點では變わらない。

〔付記〕本稿は一九九七年四川省眉山縣で開催された「全國第八屆蘇軾學術研討會」で口頭發表した原稿に加筆訂正したものである。加筆訂正に當たっては、日本大學教授青山宏先生より數々の御教示を頂いた。